



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語のデキゴトを表わす名詞的用法
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 11, 37-54
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97217
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80947
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_03_037_MegumiKUREBIT0.pdf



コリャーク語のデキゴトを表わす名詞的用法*

呉 人 恵
(富山大学)

キーワード: コリャーク語、デキゴト、名詞的用法、事象叙述との対立

1. はじめに

コリャーク語 (Koryak: チュクチ・カムチャツカ語族) には、①「動作者名詞 *имя деятеля*」、②「形動詞 *причастие*」と呼ばれる動詞語幹から派生される語がある (Zhukova 1972:137, 262)。本稿では、①②の主節述語用法に注目する。①②は、程度の違いはあるが、形態的には名詞に近いという共通点を持つ。しかし、コリャーク語の主要な文法記述である Zhukova (1972) は、①は名詞に、②は (非定形) 動詞にと異なる品詞に分類し、別個に扱っている。Zhukova (1972) は、また、①に該当する接辞として *-lʃ¹* (以下、「LH」)、②に該当する接辞として *ye-/ya-²* (以下、「GA」) の 2 種類だけを挙げている。しかし、形態的、統語的類似性を考慮に入れるならば、この 2 形式だけでは不十分である。①に類する形式としては、同じく動作者名詞の *-jo-lqəl³* (以下、「JQ」) に加え、動作名詞の *-yiq⁴* (以下、「GN」) を含めるべきである。また、②に類する形式としてはいわゆる形容詞 *n-⁵* (以下、「N」) を含めるべきである。①は名詞項や名詞修飾要素 (ただし、GN は名詞項のみ) になり、②は名詞修飾要素になる。一方、①②はいずれも主節述語としても現われ、その際、LH は不許可、JQ は予定、GN は義務、GA は事実、N は属性を表わす。

筆者は、呉人 (2008, 2010, 2011, 2014, 2017), Kurebito (2020) でこれらの形式について断片的に考察してきた。呉人 (2008) では、LH と JQ の名詞修飾用法を記述した。呉人 (2010)

* 本稿は、科学研究費基盤研究 (B) 「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」 (18H00665、代表: 呉人恵) の研究成果である。聞き取り調査では、Ajatginina Tat'jana Nikolaevna (1955 年、マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに謝意を表したい。本稿の執筆にあたっては、お 2 人の査読者の方ならびに江畑冬生氏 (新潟大学) から貴重な助言や情報をいただいた。心から謝意を表したい。ただし、本稿における誤りは、すべて筆者の責任に帰するものである。

¹ e.g. *jet-ə-lʃ-ə-n* 「来た人」 [*jet* 「来る」、*-ə-* 挿入、*-lʃ* LH、*-ə-* 挿入、*-n* 絶単]、*tejk-ə-lʃ-ə-n* 「作ったもの」 [*tejk* 「作る」、*-ə-* 挿入、*-lʃ* LH、*-ə-* 挿入、*-n* 絶単]

² GA は、共同格接周辞の前半部 *ye-/ya-* に由来する可能性がある。例は次の通り。

e.g. *ya-tva-len* 「あった」 [*ya-* GA、*tva* 「ある」、*-len* 絶単]、*ye-leʃu-lin* 「見た」 [*ye-* GA、*leʃu-* 「見る」、*-lin* 絶単] (グロス は名詞修飾の場合)

³ *-jo-lqəl* は、名詞化接辞 *-jo* と「～の材料、～になる予定のもの」の意味を表わす接辞 *-lqəl* に分析できる。ただし、本稿の例文のグロスでは便宜的に合わせて JQ と記すことにする。

e.g. *jeŋa-jo-lqəl-Ø* 「飛ぶ予定の者」 [*jeŋa* 「飛ぶ」、*-jo-lqəl* JQ、*-Ø* 絶単]、*tajk-ə-jo-lqəl-Ø* 「作る予定のもの」 [*tajk* 「作る」、*-ə-* 挿入、*-jo-lqəl* JQ、*-Ø* 絶単]

⁴ e.g. *ojecvat-yiq-ə-n* 「遊び」 [*ojecvat* 「遊ぶ」、*-yiq* GN、*-ə-* 挿入、*-n* 絶単]、*tajk-ə-yiq-ə-n* 「～を作ること」 [*tajk* 「作る」、*-ə-* 挿入、*-yiq* GN、*-ə-* 挿入、*-n* 絶単]

⁵ e.g. *n-ewji-qin* 「健啖家の」 [*n-* N、*ewji* 「食べる (自)」、*-qin* 絶単]、*n-ə-java-qen* 「利用価値のある」 [*n-* N、*-ə-* 挿入、*java* 「使う」、*-qen* 絶単] (グロス は名詞修飾の場合)

では、従来、形容詞とされてきた N を、定形動詞による事象叙述と対立する属性叙述専用の形式として記述した。呉人 (2011), Kurebito (2020) では JQ の名詞化と疑似人魚構文としての特性について考察した。呉人 (2014) では、JQ と GN の名詞化の度合いについて比較考察した。呉人 (2017) では、LH の GA に対する補完的な関係について考察した。これら一連の考察により、5 つの形式の形態的、統語的特徴については、おおよそその輪郭をつかむことができたと考える。

しかし、これらすべての形式の形態的、統語的相違点と共通点を整理し、意味的特徴を加味しつつ、統一的に論じるには至っていない。そこで本稿では、改めて、これらの形式が「デキゴトの名詞的用法」として統一的に説明できることを論じる。具体的には、①が表わす「不許可」、「予定」、「義務」といったモーダルな意味、②が表わす「事実叙述」⁶、「属性叙述」としての意味は、デキゴトを時間の流れの中で生起する動的現象として、定形動詞によって述べる「事象叙述」と対立していること、また、そのような対立が、時間的な安定性の高い名詞 vs. 時間的な安定性の低い動詞という品詞の違いにも反映していることを指摘する。

「事象叙述」は、「特定の時空間に実現するイベント(出来事)を述べるもの」(益岡 2008:4)であり、一般的には、「対象が有する属性を述べるもの」(益岡 2008:4)である属性叙述に対する概念として二項対立的にとらえられている。これに対して、本稿では、時間的な限定性のないデキゴトの叙述は、属性叙述に限らず、事象叙述に対立するものであると考えるのである。

本稿の構成は次の通りである。第 2 節で、①②に該当する形式が Zhukova (1972) の品詞分類においてどのように位置づけられてきたかを、Moll (1960) の分類も補足的に示しつつ押さえておく。第 3 節では①の LH, JQ, GN の、第 4 節では②の GA, N の形態的、統語的、意味的特徴をそれぞれ記述する。そのうえで、第 5 節では、①②が「デキゴトの名詞的用法」として統一的に説明できる根拠を示す。最後に、第 6 節で本稿の議論を総括する。

なお、本稿で考察対象とするのは、Moll (1960), Zhukova (1972) 同様、コリャーク語チャウチュヴァン (Cawcəvan) 方言である。また、これら 5 つの形式のうち、JQ を除く LH, GN, GA, N はいずれも、動詞語幹につきもっぱら名詞化だけを担う接辞というわけではない。他の品詞語幹にもつき、語幹修飾・語類変換両方の機能を兼備する。ただし、本稿では、上述の通り、デキゴトの表わし方に焦点を当てるため、動詞語幹につく場合のみを考察対象とする。

2. ①②の品詞分類における位置づけ

まず、表 1 で、主要な品詞である名詞、形容詞、動詞を、Zhukova (1972) はどのような形態的、統語的、意味的基準によって分類しているのか、また、LH, GA, GN, GA, N をどこに位置づけているのかを見ておく。なお、表中の点線は、その基準についての記述が見られないことを示す。

⁶ 「事象叙述」に対する用語として本稿で導入する。その根拠については、4.3.2.1. で述べる。

表 1 Zhukova (1972) による名詞、形容詞、動詞の分類と基準

品詞		接辞	形態的基準	統語的基準	意味的基準
名詞		JQ, GN	格・数・人称による	-----	モノのカテゴリー
動作者名詞		LH	屈折		
形容詞		N	-----	名詞句属部、主節 述語になる	モノの特徴
動詞	定形	GA	法・人称・数・時制に よる屈折	-----	動作や状態
	非定形	GA	法・人称・数・時制に よる屈折なし	述語にならない	-----

Moll (1960) も細部の違いはあるものの、基本的には Zhukova (1972) 同様の分類であると考えてよい。ただし、Moll (1960) は LH を非定形動詞の形動詞とし、GA を形動詞とはせず、定形動詞だけに分類している点が異なる。

表 1 からは、いくつかのことが読み取れる。Zhukova (1972) では、JQ, GN は通常の名詞としてしか扱われていない。しかし、JQ, GN も動詞語幹から派生され、後述のように形態的、統語的に LH に共通するふるまいをする。したがって、LH と別扱いになっているのには問題がある。GA は非定形動詞の形動詞のみならず、定形動詞にも分類されている。一方、N は非定形動詞ではなく、形容詞に分類されている。しかし、N も動詞語幹から派生され、後述のように形態的、統語的に GA に共通するふるまいをする。したがって、GA と別扱いになっているのには問題がある。加えて、名詞や（定形）動詞では統語的基準が示されず、もっぱら形態的基準だけが示されているのに対し、形容詞では形態的基準が示されず、統語的な基準だけが示されているという不統一も問題である。ちなみに、松本 (2006, 2007) は、コリャーク語と同系のチュクチ語の N を用言型とみなしているのに対し、Stassen (2005) は、逆に非動詞型とみなしている⁷。前者では統語的基準が、後者では形態的基準が優先されたためである。

このように、基準が明確でない品詞分類の中に LH, JQ, GN, GA, N を位置づけようとする、これらはばらばらに扱われ、その結果、共通性が隠れてしまうことになる。そこで、まず、5つの形式の相違点と共通点を次のように整理する。

- (A) 相違点：LH, JQ, GN は格変化して名詞項になれるのに対し、GA, N は格変化せず、名詞項にはなれない。
- (B) 共通点：数と人称を通常の名詞と同形式で区別する。主節述語になれる。その際、不許可、予定、義務といった事物に対する評価的モダリティやデキゴトの事実叙述あるいは属性叙述を表わし、事象叙述と対立する。

表 2 で 5つの形式の形態的、統語的特徴の異同を示す。異同の程度を段階的に示すことを優先するため、形態的特徴と統語的特徴は分けない。

⁷ Stassen (1997) は、チュクチ語の N (n-) を名詞化接頭辞であるとしている。

表 2 LH, JQ, GN, GA, N の形態、統語、意味的特徴

形式 特徴	①			②	
	LH	JQ	GN	GA	N
[1] 格	○	○	○	×	×
[2] 名詞項	○	○	○	×	×
[3] 名詞修飾	○	○	×	○	○
[4] 数	○	○	○	○	○
[5] 人称	○	○	○	○	○
[6] 主節述語	○	○	○	○	○
[7] 主節述語の意味	不許可	予定	義務	事実	属性

以上から、Zhukova (1972) の①②の分類とその内容は、そのままでは採用できないにしても根拠はあることがわかる。すなわち、①②を別々に分類するのは、名詞項になれるかなれないかの違いがあるためである。その一方で、同様に数・人称標示をする点では①②いずれも名詞的である。加えて、①②は名詞修飾（GN 以外）、主節述語用法などの統語的特徴も共通している。

以下では、Zhukova (1972) を適宜、修正・補強しながら、これらの形式の相違点と共通点を見ていく。その際、具体例はすでに筆者のこれまでの考察で示しているため割愛し、要点と、必要に応じて新しい例を示すにとどめる。ただし、主節述語としての用法は、本稿の骨子ともかわるため、これまでの考察で挙げた例に適宜、新たな例も加えて考察を進める。

なお、LH, JQ は、Zhukova (1972) の呼び名にならばいずれも「動作者名詞」である。しかし、実際には、自動詞語幹につく場合には主語、すなわち動作者と一致するが、他動詞語幹につく場合には目的語、すなわち被動作者と一致する。したがって、以下でこれについて言及する場合は「動作者／被動作者名詞」と呼ぶ。一方、GN も一致においては同様にふるまうが、動作を表わすため、上述のとおり、「動作名詞」と呼ぶ。

3. 相違点

3.1. 格変化

LH, JQ, GN は、必ずしも通常の名詞のように完全ではないものの格変化する。一方、GA, N は絶対格のみで現れ、その他の格変化はしない。LH, JQ, GN の格変化を動物名詞 qoja 「トナカイ」のそれと比較した表 3 を見られたい（いずれも自動詞語幹からの派生の例である）。表 3 からは LH が JQ, GN よりも格変化の程度が高いようにも見えるが、語彙的な固定度が影響する可能性も否定できないため、一般化はできない。

表 3 動物名詞、LH, JQ, GN の格標示のパラダイム

		動物名詞	LH	JQ	GN
		qoja 「トナカイ」	inenɣəjulev-ə-lɬ 「教える人＝教師」	jeŋa-jo-lqəl 「飛ぶ予定の人」	ta-ja-ŋ-ɣiŋ 「家作り」
絶対格	単	qoja-ŋa	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-n	jeŋa-jo-lqəl-Ø	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-n
	双	qoja-t	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-t	jeŋa-jo-lqəl-te	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-t
	複	qoja-w	inenɣəjulev-ə-lɬ-u	jeŋa-jo-lqəl-o	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-o
道具格		qoja-ta	inenɣəjulev-ə-lɬ-e	-----	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-a
場所格		qoja-k	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-k	jeŋa-jo-lqəl-ə-k	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-k
与格		qoja-ŋ	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-ŋ	-----	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-ŋ
方向格		qoja-jtəŋ	inenɣəjulev-ə-lɬ-etəŋ	-----	-----
沿格		qoja-jpəŋ	-----	-----	-----
奪格		qoja-ŋqo	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-ŋqo	-----	-----
接触格		qoja-jeta	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-jite	-----	-----
原因格		qoja-kjet	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-kjit	-----	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-kjet
様態格		qoja-no	inenɣəjulev-ə-lɬ-ə-nu	jeŋa-jo-lqəl-o	-----
共同格		ɣa-qoja-ta~ ɣajq-ə-qoja-ta ɣawən-qoja-ma	ɣejq-ə-inenɣəjulev-ə-lɬ-e ɣawən-inenɣəjulev-ə-lɬ- ə-ma	-----	-----

3.2. 名詞項

LH, JQ, GN は名詞項になることができるが、GA, N はなることができない⁸。(1a) のように主要部名詞を取らない例は容認されず、(1b) のように必ず主要部名詞を要求する。GA も同様である (2a)(2b)。

(1a) *Wojv-ə-ŋqo jal-la-j-Ø ŋənvəq n-ə-vetat-qenaw.

village-E-ABL come-PL-PF-3S many N-E-work-ABS.PL

(1b) Wojv-ə-ŋqo jal-la-j-Ø ŋənvəq n-ə-vetat-qenaw ʃojacek-o.

village-E-ABL come-PL-PF-3S many N-E-work-ABS.PL man-ABS.PL

「村から大勢の働き者の男たちがやってきた」

(2a) *ŋanko jaja-k ko-tva-ŋ-Ø ɣa-kmiŋal-lin.

there house-LOC IPF-be-IPF-3SG.S GA-have.a.baby-ABS.SG

(2b) ŋanko jaja-k ko-tva-ŋ-Ø ɣa-kmiŋal-lin el'ʃa-Ø.

there house-LOC IPF-be-IPF-3SG.S GA-have.a.baby-ABS.SG woman-ABS.SG

「あそこの家に出産した女がいる」

⁸ 一方、Kibrik et al. (2004:281) は、アリュートル語の形容詞語幹からなる N が、主要部名詞を取らずに現われる次の例を挙げている（グロスは原文の通り）。

Naqam ɣa-n.pasus.av-laŋ unɣunɣu-pilɣ-ŋaɣu, to ŋita.q nə-ɣərtap-qina-t.
only RES-leave baby-DIMIN-NOM+PL and two ADJ-elder-ADJ-3DU
‘Only the little children are left and two elders...’

名詞項としての LH, JQ, GN は、名詞項や付加詞を取ることができる。主語が現われる場合には、定形動詞と異なり、絶対格や能格は取れず、属格を取る。この点、名詞的な統語特徴を保持していると言える。一方、斜格名詞や副詞は、定形動詞の場合と同様に現れることができる（呉人 2011, 2014）。

4. 共通点

次に、LH, JQ, GN, GA, N に共通する特徴として、数・人称標示、主節述語としての用法について見る。

4.1. 数・人称標示

LH, JQ, GN, GA, N は、名詞同様に絶対格単数、双数、複数を区別する。動物名詞、LH, JQ, GN, GA, N の数標示を表 4 に示す（LH, JQ, GN, GA はいずれも自動詞語幹から派生した例である）。

表 4 動物名詞、LH, JQ, GN, GA, N の数標示

		絶対格		
		単	双	複
動物名詞	qoja 「トナカイ」	qoja-ŋa	qoja-t	qoja-w
LH	inenyøjulev 「教える」	inenyøjulev-ə-lʃ-ə-n	inenyøjulev-ə-lʃ-ə-t	inenyøjulev-ə-lʃ-u
JQ	jeŋa 「飛ぶ」	jeŋa-jo-lqəl-Ø	jeŋa-jo-lqəl-te	jeŋa-jo-lqəl-o
GN	ta-ja-ŋ 「家作りする」	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-n	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-ə-t	ta-ja-ŋ-ɣiŋ-o
GA	kmiŋal 「出産する」	ɣa-kmiŋal-lin	ɣa-kmiŋal-linet	ɣa-kmiŋal-linew
N	ewji 「食べる」	n-ewji-qin	n-ewji-qinet	n-ewji-qinew

LH, JQ, GN, GA, N は、通常の名詞同様、述語になる場合、自動詞では主語の、他動詞では目的語の人称標示を受ける。1 人称・2 人称の人称接辞は自立の人称代名詞（ɣəmmo 1 絶単、muji 1 絶双、muju 1 絶複；ɣəcci 2 絶単、tuji 2 絶双、tuju 2 絶複）に由来する。一方、3 人称は絶対格単数・双数・複数と同形である（表 3, 4, 5, 6 の網掛け部分を比較されたい）。これらは、定形動詞の人称マーカ―とは異なる形式である。なお、5 つの形式はいずれも同じ人称接辞を取るが、1 つの表に収まらないため、表 5 で LH, JQ, GN、表 6 で GA, N を示す（いずれも自動詞語幹から派生した例である）。

表 5 親族名称、LH, JQ, GN の人称標示

		親族名称	LH	JQ	GN
		en'pici 「父」	inenɣəjulev-ə-lɕ 「教える人→教師」	jeŋa-jo-lqəl 「飛ぶ予定の人」	ta-ja-ŋ-yiŋ 「家作り」
1	単	en'pici-jyəm	inenɣəjulev-ə-lɕ-iyəm	jeŋa-jo-lqəl-eyəm	ta-ja-ŋ-yiŋ-eyəm
	双	en'pici-muji	inenɣəjulev-ə-lɕ-ə-muji	jeŋa-jo-lqəl-ə-muji	ta-ja-ŋ-yiŋ-ə-muji
	複	en'pici-muju	inenɣəjulev-ə-lɕ-ə-muju	jeŋa-jo-lqəl-ə-muju	ta-ja-ŋ-yiŋ-ə-muju
2	単	en'pici-jyi	inenɣəjulev-ə-lɕ-iyi	jeŋa-jo-lqəl-eyə	ta-ja-ŋ-yiŋ-eyə
	双	en'pici-tuji	inenɣəjulev-ə-lɕ-ə-tuji	jeŋa-jo-lqəl-ə-tuji	ta-ja-ŋ-yiŋ-ə-tuji
	複	en'pici-tuju	inenɣəjulev-ə-lɕ-ə-tuju	jeŋa-jo-lqəl-ə-tuju	ta-ja-ŋ-yiŋ-ə-tuju
3	単	en'pic-Ø	inenɣəjulev-ə-lɕ-ə-n	jeŋa-jo-lqəl-Ø	ta-ja-ŋ-yiŋ-ə-n
	双	en'pici-t	inenɣəjulev-ə-lɕ-ə-t	jeŋa-jo-lqəl-te	ta-ja-ŋ-yiŋ-ə-t
	複	en'pici-w	inenɣəjulev-ə-lɕ-u	jeŋa-jo-lqəl-o	ta-ja-ŋ-yiŋ-o

表 6 GA, N の人称標示

		GA	N
		ɣ-ewji 「食べる」	n-ewi 「よく食べる」
1	単	ɣ-ewji-jyəm	n-ewji-jyəm
	双	ɣ-ewji-muji	n-ewji-muji
	複	ɣ-ewji-muju	n-ewji-muju
2	単	ɣ-ewji-jyə	n-ewji-jyə
	双	ɣ-ewji-tuji	n-ewji-tuji
	複	ɣ-ewji-tuju	n-ewji-tuju
3	単	ɣ-ewji-lin	n-ewji-qin
	双	ɣ-ewji-linet	n-ewji-qinet
	複	ɣ-ewji-line	n-ewji-qinew

4.2. 名詞修飾

LH, JQ, GA, N はいずれも名詞修飾の機能を担う。一方、動作名詞の GN は名詞修飾をおこなわない。ここではまず、名詞修飾句属部となるだけでなく、名詞修飾節述語となる LH, JQ についてみる。名詞修飾をする場合には、LH, JQ とともに絶対格で主要部名詞と一致し、その他の斜格で現れることはない。属部と主要部名詞の配列順序は固定していない。

名詞修飾節の述語になる場合には、主要部名詞がどのような格を取るにかかわらず、LH, JQ とともに絶対格しか取れない (呉人 2008)。一方、名詞修飾節内の主語や目的語は定形動詞と現われる場合と同じ格接辞を取る。

一方、GA, N について、Zhukova (1972) は、GA だけを形動詞に分類し、N は形容詞に分類している。しかし、N も動詞語幹から派生され (e.g. n-ə-ŋaqtke-qen 「臭い」 [n- N, -ə- 挿入, ŋaqtke 「臭いにおいがする」, -qen 絶単]、n-ə-nu-qin 「食べられる」 [n- N, -ə- 挿入, nu 「食べる (他)」, -qin 絶単]、名詞修飾をするという特徴から見るならば、N を GA と区別して扱う根拠は見いだせない。

GA, N は、名詞修飾をする場合、主要部名詞と数の一致を示す (3)(4)。属部と主要部名詞の配列順序は固定していない。(3) の副詞 kitkit 「少し」のように両者の間に他の語が挿入されることもある。ただし、GA や N が名詞修飾する際、斜格名詞を取る例は確認されてい

ない。

- (3) Jatan qun amu ənpə-qlavol-o kitkit
only probably probably old-husband-ABS.PL a.tiny.bit
ya-qaj-iwwici-linew ko-tva-la-ŋ-Ø.
GA-little.bit-drink-ABS.PL IPF-be-PL-IPF-3S
「恐らく少し飲んだ老人たちがいるだけだった」

- (4) Wuccin n-ə-valom-qen kəmiŋ-ə-n.
this N-E-listen-ABS-SG child-E-ABS.SG
「これは聞き分けのいい子供だ」

4.3. 主節述語

LH, JQ, GN, GA, N はいずれも主節述語になる。その際、典型的な名詞同様の人称標示を受け、自動詞の場合には主語の、他動詞の場合には目的語と一致する。以下では、評価のモダリティを表わす LH, JQ, GN と、事実叙述・属性叙述を表わす GA, N を説明の便宜のためにひとまず分けて見ていく。

4.3.1. 評価のモダリティ表わす LH, JQ, GN

LH, JQ, GN は主節述語になる場合、「A は B だ」というコピュラ文になる (5)。

- (5) yəmmo en'pici-jyəm / inenyəjulev-ə-lŋ-iyəm.
1SG.ABS father-1SG.S teach-E-LH-1SG.S
「私は父親／教師だ」

加えて、LH は不許可、JQ は予定、GN は義務という評価的なモダリティを表わす。予定を表わす JQ を、認識モダリティに分類しないのは、ここでいう「予定」には、その予定を実現することが求められているという義務的なニュアンスも込められているためである。このうち、LH の主節述語としての用法は、今回新たに確認されたものである。LH, JQ, GN が主節述語になる際、主語や目的語は定形動詞同様の格標示を受ける。すなわち、自動詞主語・他動詞目的語は絶対格、他動詞主語は能格を取る。斜格名詞や副詞なども定形動詞同様にとることができる。さらに、GN では定形動詞にも見られない与格主語が現われる例も確認されている (8c)。このことから、主節述語になる場合には、統語的に定形動詞の特徴により近づくとともに、新たな格枠組みも現われていると言える。(6a)(6b) は LH の自動詞の例、(6c) は他動詞の例、(7a) は JQ の自動詞の例、(7b) は他動詞の例、(8a)(8b) は GN の自動詞の例、(8c) は他動詞の例である。

- (6a) Ənano ɲəto-lɕ-ə-n kəmiŋ-ə-n.
impossible go.out-LH-E-3SG.S child-E-ABS.SG
「子供は出て行ってはいけない」
- (6b) Ənano jəʕa-tva-lɕ-ə-mojo, əməŋ caj-o-ma jəccət-o
impossible simply-be-LH-E-1PL.S all tea-drink-COM thread-ABS.PL
mət-ko-n-kawj-aw-ŋ-ə-naw.
1PL.A-IPF-CAUS-twine-CAUS-IPF-E-3PL.O
「私たちはただ座っていてはいけない。お茶を飲んでいる間でも、糸を撚っていた」
- (6c) Ənano ənnəju ɣala-lɕ-o.
impossible these (ABS) pass-LH-3PL.O
「これらを通り過ぎてはいけない」
- (7a) ɣəcci ecɣi va-jo-lqəl-eyə ɣ-en'pici-te jaja-k.
2SG.ABS today be-JQ-2SG.S COM-father-COM house-LOC
「おまえは今日、父親と家にいることになっている」
- (7b) Mitiw ɣəm-nan ɲəlvəlɕ-ə-ŋqo jəle-jo-lqəl-Ø
tomorrow 1SG-ERG reindeer.herd-E-ABL bring-JQ-3SG.O
təm-jo-n.
kill-NML-ABS.SG
「私は明日、群れから殺したトナカイを持って来ることになっている」
- (8a) Ekilu ko-ŋvo-ŋ-Ø ʕejŋev-ə-tku-k, jaqam ʕopta
if IPF-begin-IPF-3SG.S call-E-ITR-INF immediately again
ocitko-ɣiŋ-ə-n.
responde-GN-E-3SG.S
「もし呼び始めたら、すぐに答えなければならない」
- (8b) Ekil ənno an'pəc-ə-ŋ vəʕaj-paje-ɣiŋ-ə-n.
moreover 3SG.ABS father-E-DAT grass-reap-GN-E-3SG.S
「その上、彼は、父親に草刈りをしてやらなければならない」
- (8c) Ekil ɣəmkəŋ ɣəcci jawjat-ɣiŋ-eyə.
moreover 1SG.DAT 2SG.ABS feed-GN-2SG.O
「そのうえ、私にはお前を食べさせなければならない」

LH, JQ, GN が評価的モダリティを表わすことと、名詞的な形式であることは無関係ではない。主節述語として用いられる LH, JQ, GN は、定形動詞のように TAM の標示を受けることはない。TAM は定形動詞がデキゴトを時間の流れの中で生起する動的現象として描写する際に必要とされるカテゴリーである。一方、名詞では、それらが表わされないことにより、デキゴトを時間に限定されない、より固定的あるいは静的な現象としてとらえることが可能になるのだと考えられる。

4.3.2. 事実叙述の GA, 属性叙述の N

GA, N は主節述語として用いられる場合、名詞項や付加詞を定形動詞同様に取りることができる。(9a) は GA の自動詞の例、(9b) は他動詞の例、(10a) は N の自動詞の例、(10b) は他動詞の例である。

- (9a) yəty-ə-pel'-Ø cejmək ya-tva-len.
lake-E-DIMIN-ABS.SG near.by GA-be-3SG.S
「小さな湖が近くにあった」
- (9b) əcy-ə-nan ɲəcceq walqa-ja-t ye-tejk-ə-linet-Ø
3PL-E-ERG two jawbone-house-ABS.DU GA-make-E-3DU.O-3PL.A
teqən l'əye-ja-w.
as.if real-house-ABS.PL
「彼らは、アザラシの顎骨製の 2 つの家を伝統的なユルトのように建てた」
- (10a) L'age-Ø n-ə-waŋe-qen.
L'age-ABS.SG N-E-sew-3SG.S
「リヤゲは裁縫が上手だ」
- (10b) Qoj-en-Ø pajl'əŋ-ə-n ʃopta paj-ə-k
reindeer-GEN-ABS.SG bladebone-E-ABS.SG also foretell-E-LOC
n-ə-java-qen.
N-E-use-3SG.O
「トナカイの肩甲骨も占いに利用できる」

ところで、Zhukova (1972) は、このような GA を定形動詞の屈折体系に組み込み、過去 I に対立する過去 II としている。一方、N は、(10a)(10b) から明らかなように同じく動詞語幹につき、主節述語になるにもかかわらず、定形動詞の屈折体系には組み込まず、形容詞としている⁹。

4.3.2.1. 主節述語として用いられる GA の意味

主節述語として用いられる GA の意味については、見解が定まっているとはいえない。Moll (1960) は、過去時制を発話時まで完了した動作と、発話時よりもずっと以前に完了した動作の 2 種類に分類し、GA はそのうち、後者を表わす形式であるとしている。Zhukova (1972: 234) も同様に過去時制を 2 種類に分けている。ただし、Moll (1960) とは異なり、2

⁹ ただし、同系のチュクチ語の N について、Skorik (1977) は定形動詞として、現在形 I (限界的) に対する現在形 II (非限界的) としている。同じくチュクチ語について、Dunn (1999: 191) は、GA, N をまとめて「静的屈折 (stative inflection)」の形式として、「動的屈折 (active inflection)」、すなわち、定形動詞と区別している。さらに、Kibrik et al. (2004) でも、アリユートル語の GA, N を定形動詞としたうえで、単人称標示形式として、他の多人称標示形式とは区別している。これらの先行研究では N も動詞により近い形式として位置づけようとしてきたことがうかがえる。

種類の違いは、過去における動作の完了を表わすか、間接体験を表わすかであり、GA はこのうち、後者を表わす形式であるとしている。いずれも、過去のデキゴトを表わすとする点では共通しているが、それを発話時からの時間の遠近によってとらえるのか、証拠性の有無というモダリティによってとらえるのかが異なるのである。

以上を踏まえ、Moll (1960), Zhukova (1972) の是非を検証する。まず、両者の見解が一致している、GA が過去のデキゴトを表わすという点について見る。すると、たしかに、多くの例は、過去に起こったデキゴトについて叙述していることがわかる (11)(12)。

- (11) *ŋanko apuqa-k janot ko-tva-ŋ-e, to vəʃajok ya-jaly-ə-lenat*
 there Apuka-LOC at.first IPF-be-IPF-3DU.S and later GA-move-E-3DU.S
jajol-wajam-etəŋ.
 fox-river-ALL

「彼らは以前、アプカに住んでいたが、その後、ジャジョル川に移り住んだ」

- (12) *Ajŋon ənnen el'ʕa-Ø əjava-nota-ken-Ø y-ekmil-lin-Ø*
 in.the.past one woman-ABS.SG remote-tundra-GEN-ABS.SG GA-take-3SG.O-3SG.A
cawcəva-ta to ya-n-n'ajt-al-len-Ø
 reindeer.herder-INS(ERG) and GA-CAUS-return.home-CAUS-3SG.O-3SG.A
ŋalvəʃ-etəŋ.
 herd-ALL

「昔、あるトナカイ遊牧コリャークが遠くから嫁をもらって、トナカイの群れに連れて帰ってきた」

さらに次の (13)(14) は、過去に起こった出来事の結果が残っている例と解釈できる。

- (13) *Ecyi-kine-w jeppə n-əppul'u-qinaw, ewən əməŋ ye-jyule-linew-Ø*
 now-GEN-ABS.PL still N-small-3PL.S probably all GA-know-3PL.O-3PL.A
miŋkəje va-lʕ-o ŋajejo ʕeq-iml-u, qun-qok əməŋ
 how be-LH-3PL.S those(ABS) bad-water-ABS.PL yes all
jinnə ləyi.
 what(ABS.SG) know

「今の人たちはまだ若いのに、それらのヴォッカがどのようなものかなんでも知っている」

- (14) *Ekilu ya-pʕa-lenaw, waca kəcy-ə-nu-te ne-ku-nt-ə-ŋ-new.*
 if GA-dry-3PL.S sometimes dry-E-eat-INS INV-IPF-do-E-IPF-3PL.O
 「もし乾燥していたら、時には乾燥したまま食べる」

しかし、次の (15)(16) は、過去のデキゴトとしては解釈できない。これらの例はむしろ、

習慣的な事実を述べている。「叫ぶ」「濡れる」という従属節の述語が表わすデキゴトの発生が、GA が表わす「腹を立てる」「咳き込み始める」というデキゴトを誘発するという因果関係を表わしているという意味での時間的な前後関係があるだけである。(15) では GA が主語の *ecyi-kine-w* 「今の人たち」、(16) では時間副詞 *ecyi* 「今」とそれぞれ共起していることにも注意されたい。

- (15) *Ecyi-kine-w* *kitkit* *mal'-ʒaqulv-ə-kumɣat-ə-k*,
now-GEN-ABS.PL *as.soon.as* *a.little-roughly-E-scream-E-LOC*
ewən *ya-ɲotaw-lenaw*.
already *GA-get.angry-3PL.S*
「今の人たちは、少しでも荒っぽく叫ばれたら、もうすぐに腹を立てている」

- (16) *Ecyi* *kitkit* *mət-ko-wel-al-la-ɲ*, *ewən* *ya-ɲvo-mojo*
now *as.soon.as* *1PL.S-IPF-wet-VBL-PL-IPF* *already* *GA-begin-1PL.S*
cawjɪŋ-cij-ə-k.
cough-INT-E-INF
「今では、私たちは濡れるとすぐに咳き込み始めている」

この 2 例からは、過去は GA が表わす本質的な意味ではないことがうかがえる。とすると、GA が発話の時点よりもはるか以前に起きたデキゴトを表わすという Moll (1960) の解釈も成立しないということになる。

次に、Zhukova (1927) の GA が間接体験だとする見解の是非を見る。たしかに、GA はノンフィクションでよりも、フィクションでの出現率の方がはるかに高い。コリヤーク語のノンフィクションのテキスト 55 編、フィクションのテキスト 39 編を収録した Kurebito (2014, 2016, 2017, 2018, 2019) では、動詞語幹に接続した 664 の GA のうち、ノンフィクションで現れた GA が 126 (19%)、フィクションで現れた GA が 538 (81%) と、フィクションにおける出現度が圧倒的に多いことがわかる。フィクションで語られる内容は話者自身の直接体験ではないためであるとも解釈できる。

間接体験かどうかの判断材料の 1 つとして、1 人称が主語になる場合が考えられる。普通は、1 人称が主語であるにもかかわらず間接体験というのは考えにくいからである。ただし、たとえば、「気づいたら無意識にこうしていた」のように、デキゴトに対する意図的な関与が想定されない文脈が与えられれば、1 人称が主語の場合でも間接体験と解釈することが可能であろう。Zhukova (1972) も同様の指摘をしている。たとえば、次の (17) の例がそれに該当する。

- (17) *Təmɲo* *t-ə-lɲ-ə-n-Ø* *ye-jəlqet-ə-ɣəm*.
unnoticed *1SG.A-E-regard-E-3SG.O-PF* *GA-go.asleep-E-1SG.S*
「私は、いつの間にか気づかずに眠ってしまっていた」

しかし、このような文脈が想定されない例も見られる。次の (18)(19) では、主語である話者が自分の行為に対して無意識であったというような状況を想定することは難しい。

- (18) Məjew mɔcy-ə-nan ewən ɣa-n-cocəm-aw-len-Ø
 because 1PL-E-ERG already GA-CAUS-get.ready-CAUS-3SG.O-1PL.A
 ujilq-ə-n, emec janot mət-ə-ŋvo-la-n
 bonfire-E-ABS.SG already hopefully 1PL.A.OPT-E-begin-PL-3SG.O
 jəcil-ə-k kəmiŋ-ə-n ujilq-ə-k.
 lay-E-INF child-E-ABS.SG bonfire-E-LOC
 「なぜなら、私たちはすでに焚き火を用意して、その上に子供を横たえようとしていたからだ」

- (19) Unmæk amu ɣa-kavi-ɣəm wajam-jewen lejv-ə-k, ejeŋu-ɣili-k.
 very.much probably GA-get.used.to-1SG.S river-along walk-E-INF fish-search-INF
 「私は川岸を歩いたり釣りをしたりするのにとても慣れていた」

(18)(19) とともに、GA で表わされるデキゴトが話者自身の直接体験に基づく行為であることは間違いない。したがって、GA は必ずしも間接体験を表わすとは限らない。過去という時間の前後関係や、間接体験という証拠性のモダリティではとらえられないこのような GA は、デキゴトを時間の流れに沿って生起する「事象」としてとらえるのではなく、むしろ時間に限定されない、固定した「事実」としてとらえる形式であると考え、Moll (1960), Zhukova (1972) では説明できない例も矛盾なく説明できるように思われる。本稿では、このような GA の働きを、事象叙述に対して、「事実叙述」と呼ぶことにする。過去、間接体験と言った意味は、むしろ事実叙述から派生した二次的な意味と考えるべきであろう。

GA を固定した事実を表わす形式とする見方は、コリャーク語ではなく、同系のチュクチ語やアリュートル語の記述に近い記述を見出すことができる。チュクチ語の GA について、Skorik (1977:35) は過去 I に対して結果を表わす過去 II であるとし、時間的な流れとしてではなく、発話時まで経過した状態やプロセスの結果としてデキゴトを表わす形式であるとしている。さらに、Dunn (1999:191) は、恒常的な状態の獲得を表わす形式として、後述する N とともに「静的な動詞」としてまとめている。アリュートル語の GA について、Kibrik et al. (2004: 254) は、GA はデキゴト (event) というよりも事実 (fact) として状況を描写する形式であり、行為の結果を表わす ‘resultative’ であるとしている。ただし、いずれも過去に発生したデキゴトを表わすとしている点は、Zhukova (1972) や Moll (1960) と変わらない。しかし、GA が時間の前後関係によっては捉えられないことは、上例で見た通りである。

4.3.2.2. 主節述語として用いられる N の意味

一方、N は属性叙述専用の形式である (呉人 2010)。すなわち、時間の流れを超越したモノの固定的・恒常的特性を描く叙述に専用に用いられる形式である。これに対して、一時的な状態を表わす場合には、時間の流れに沿って展開するデキゴトを描く「事象叙述」の形式、

すなわち、TAM を備えた定形動詞に変換しなければならない。(20a) は属性叙述の N の例、(20b) はこれに対立する事象叙述の例である。N は (20c) に見るように、ecyi 「今」のようない時的な時間を表わす時間副詞とは共起できないことにも注意されたい。

- (20a) ənno unmək n-ewji-qin.
3SG.ABS very.much N-eat-3SG.S
「彼／彼女はとても健啖家だ」
- (20b) Ecyi ənno unmək k-ewji-ŋ-Ø.
now 3SG.ABS very.much IPF-eat-IPF-3SG.S
「今、彼／彼女がとてもよく食べている」
- (20c) *Ecyi ənno unmək n-ewji-qin.
now 3SG.ABS very.much N-eat-3SG.S

以上から、GA と N は、形態的、統語的ふるまいが類似しているだけでなく、主節述語として用いられる場合、時間的な限定を受けない固定的な事実や属性を叙述し、事象叙述と対立している点でも類似しているといえる。

5. 定形動詞を補完するデキゴトの名詞的用法

以上、LH, JQ, GN, GA, N の形態的、統語的特徴の異同を整理するとともに、主節述語としての意味的特徴について見てきた。まず、これらがいずれも形態的には名詞的であることを確認したうえで、名詞項になるかならないかという形態的ふるまいの違いから、Zhukova (1972) 同様に、LH, JQ, GN を 1 つのグループに、GA, N をもう 1 つのグループに分類した。また、このような形態的な違いは、前者は評価のモダリティ、後者は事実叙述、属性叙述という、それぞれのグループが主節述語として表わす異なる意味にも対応していることを示した。

とはいえ、さらに大きな括りで見ると、これらの 5 形式は、デキゴトを時間に限定されない評価、事実、属性として述べる点で、いずれも事象叙述と対立している。動詞として表わすべきデキゴトの叙述を、名詞にゆだねることにより、TAM のような定形動詞に付与されるカテゴリーから解放される。それにより、これらのカテゴリーに制限されないデキゴトの叙述が可能になる。そのような叙述が、LH, JQ, GN の表わす不許可、予定、義務と言った評価のモダリティであり、GA, N が表わす事実叙述、属性叙述であると考えるのである。

デキゴトを表わすのに、動詞を用いずに名詞を用いて表現した構文を広く「名詞構文 nominal construction」という。「ある現象を時間的に変化する動的現象として表現するより、空間的な表象、静的・瞬間的な視覚として捉える印象的な文体において、名詞構文がしばしば用いられる」(亀井等 1995:1329) とされる。後半部分はさておき、前半の「ある現象を時間的に変化する動的現象として表現する」というのは、事象叙述に他ならない。事象叙述は、いつ、どのような時間的な局面において、どのようにデキゴトが発生したかを示す TAM の標識を持つ定形動詞によっておこなわれる。一方、名詞述語文は TAM の標示がなされず、時間的な限定のない静的あるいは固定的な事象としてデキゴトを捉えられ、考えられるので

ある。

ところで、このようなデキゴトの名詞的な叙述の仕方は、コリャーク語に限らず、諸言語に見られるのではないだろうか。身近な例としては、日本語が挙げられる。節で始まり名詞で終わる「体言締め文」あるいは「人魚構文 mermaid construction」はその一例であろう（角田 2011:53）。Tsunoda (2020) ではこの構文を通言語的に比較対照しているが、文末名詞が形式名詞の場合、義務、助言といったモーダルな意味を表わす言語が多いことを指摘している。Tsunoda (2020) に寄稿した Kurebito (2020) では、コリャーク語では自立名詞ではなく接辞の LH, JQ, GN が文法化してモーダルな意味を表わすことから、「疑似人魚構文 (quasi-mermaid construction)」と名づけて人魚構文との平行性を指摘した。

新屋 (2014:85) は、同様の構文を「文末名詞文」と呼び、文末名詞が、名詞本来の事物をモノとして差し出す働きから外れて、述定に用いられるようになることにより、状況語や規定語として助動詞的な働きを帯びることを指摘している。新屋 (2014) はさらに、文末名詞文では、動詞の特徴であるテンス、アスペクト、意志性といったカテゴリーが捨象されることで、あらわな指示性が回避されると言う。

ここで改めて想起されるのは、Givón (2001) が提案した「時間的安定性 (Time Stability)」の概念である。Givón (2001) は、名詞、形容詞、動詞が「時間的安定性」という意味的基準のスケールにおいて連続相を成しており、最も時間的安定性が高い極に位置するのは名詞、反対に最も安定性が低い極に位置するのは動詞であるとしている。一方、形容詞は両者の中間に位置し、より時間的安定性が高く名詞に近いものと、より時間的安定性が低く動詞に近いものがあるとしている。名詞と動詞のこのような時間的安定性の違いを利用して、定形動詞では表わしえないデキゴトの意味領域を、コリャーク語の LH, JQ, GN, GA, N や日本語の人魚構文（あるいは体言締め文、文末名詞文）は補完的に表わしていると言えるのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、コリャーク語の LH, JQ, GN, GA, N を取り上げ、これらの形態的・統語的異同を整理したうえで、主節述語として働く際に共通する意味を探った。その結果、次のことが明らかになった。

- I. LH, JQ, GN は格変化をして名詞項になるのに対して、GA, N は名詞項になれないという違いはあるが、いずれも名詞同様の数・人称標示を受けることから、形態的には名詞的な形式である。
- II. これらが主節述語になる場合、LH は不許可、JQ は予定、GN は義務という評価的なモダリティを表わす。一方、GA は事実叙述、N は属性叙述を表わす。
- III. これらの意味は、デキゴトを時間の流れの中でとらえる事象叙述と対立している。すなわち、定形動詞で表わされる事象叙述ではカバーできない意味領域をこれらの名詞的な形式が補完していると考えられる。

ところで、この問題は、名詞と動詞という通常は明瞭に区別される 2 つの品詞の連続性を

考えることにも繋がる。Hengeveld et al. (2004) は、類型論的立場から、品詞を機能的に分類することを提案している。すなわち、述語句の主要部、述語句の修飾部、指示句の主要部、指示句の修飾部という 4 つの統語的スロットを設定し、これら 4 スロットが異なる語彙素によって埋められるタイプを *differentiated* なタイプとし、それぞれを動詞、名詞、形容詞、副詞とする。一方、述語句の主要部以外の 3 つのスロットが同じ語彙素により埋められるタイプを *flexible* なタイプとし、それぞれの語彙素を動詞、非動詞とする。述語句の主要部以外のスロットがいくつかの異なる統語的手段により表わされるタイプを *rigid* として分類する。とはいえ、どのタイプでも動詞は普遍的な品詞として認められている。

しかし、LH, JQ は述語句主要部、指示句主要部、指示句修飾部、GN は述語句主要部、指示句主要部、GA, N は述語句主要部、指示句修飾部にそれぞれまたがって機能することができる。すなわち、これらの 5 形式に共通しているのは、述語句主要部のスロットを埋めることができるという点である。これは、Hengeveld et al. (2004) の言う *differentiated*, *flexible*, *rigid* のどのタイプにもあてはまらないのである。名詞項になったり、名詞修飾要素となったりする一方で、述語句主要部にもなるこのようなタイプについても考慮に入れる必要があることを、これらの形式は示唆していると言えよう。

略語

A=agent-like argument (transitive subject), ABL = ablative, ABS=absolutive, ADJ=adjective, ALL=allative, CAUS=causative, COM=comitative, DAT=dative, DIMIN=diminutive, DU=dual, E=epenthetic, ERG=ergative, GEN=genitive, INF=infinitive, INS=instrumental, INT=intensifier, INV=inverse, IPF=imperfect, ITR=iterative, LOC=locative, NML=nominalizer, NOM=nominative, O=transitive object, OPT=optative, PF=perfect, PL=plural, RES=resultative, S=single argument (intransitive subject), SG=singular, VBL=verbalizer

参考文献

- Dunn, M. J. (1999) A Grammar of Chukchi. A Thesis Submitted for the Degree of Doctor of Philosophy of Australian National University.
- Givón, T. (2001) *Syntax: An Introduction Vol. I*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hengeveld, K., J. Rijkhoff and A. Sieweierska (2004) Parts-of-speech Systems and Word Order. *Journal of Linguistics* 40 (3): 527–570.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1995)『言語学大辞典 第6巻 述語編』東京：三省堂。
- Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. and Muravyova, I. A. (2004) *Language and Folklore of the Alutor People*. ELPR Publication Series A2-042. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 呉人恵 (2008)「分詞および関係詞によるコリャーク語関係節の相補的形成」『北方人文研究』1: 19-41.
- 呉人恵 (2010)「コリャーク語の属性叙述—主題化のメカニズムを中心に」『言語研究』138: 115-147.
- 呉人恵 (2011)「コリャーク語の名詞化—動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス」『北方言語研究』1: 41-62.
- 呉人恵 (2014)「コリャーク語における動作名詞と動作主・被動作主名詞—名詞化の度合い

- に注目して一」『北方言語研究』4: 43-64.
- 呉人恵 (2017) 「コリャーク語の「形動詞」の機能：「動作者名詞」との比較を通して」『北方人文研究』10:145-164.
- Kurebito, M. (2020) Koryak. In: Tasaku Tsunoda (ed.) *Mermaid Construction, A Compound-predicate Construction with Biclausal Appearance*, 817-849. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
- Kurebito, M. (ed.) (2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2017) *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2018) *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2019) *Koryak Text 5*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 益岡隆志 (2008) 『叙述類型論』東京：くろしお出版.
- 松本克己 (2006) 『世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論』東京：三省堂.
- 松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語 日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂.
- Moll, T. A. (1960) *Korjasko-russkij Slovar'*. Leningrad: Uchpedgiz.
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』東京：ひつじ書房.
- Skorik P. Ja. (1977) *Grammatika Chukotskogo Jazyka I*. Moskva/Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Stassen, L. (1997) *Intransitive Predication*. Oxford: Clarendon Press.
- Stassen, L. (2005) Predicative Adjectives. In: M. Haspelmath, M. S. Dryer, D. Gil and B. Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*, 478-481. Oxford: Oxford University Press.
- 角田太作 (2011) 「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1: 53-75.
- Tsunoda, T. (ed.) (2020) *Mermaid Construction, A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance*, Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
- Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjaskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Nominal Usage for Denoting Events in Koryak

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

The present paper considers the affixes -lŋ (LH), -jo-lqəl (JQ), which derive agentive/patientive nouns, -yinj (GN), which derive action nouns, and ye-/ya- (GA) and n- (N), which derive adjectival participles in Koryak, and examines the morphological and syntactic differences, as well as similarities between them. It also explores the features and meanings common to these seemingly unrelated forms when becoming predicates in the main clause. Consequently, the following conclusions were drawn.

- (1) LH, JQ, and GN inflect according to cases and become an argument, while GA and N cannot. However, they all receive number and person markings like ordinary nouns. In this respect, they are all nominals.
- (2) When these forms become a predicate in the main clause, LH, JQ, and GN represent evaluative modalities such as non-permission, schedule, and obligation. GA represents ‘fact predication,’ which sees events as fixed facts that are not limited to time, and N represents ‘property predication,’ which denotes the permanent attributes of things.
- (3) In fact, these seemingly unrelated meanings, such as the evaluative modality, fact predication, and property predication, are all common in that they all capture events as fixed and time-stable phenomena that are not limited to time. In this respect, they are in opposition with ‘event predication,’ which captures events in the flow of time. That is, it is considered that these nominal forms, such as LH, JQ, GN, GA, and N, complement the semantic areas that cannot be covered by the event prediction expressed by finite verbs.

(くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp)